

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

藤 田 洋 治

(地域教育文化学部)

一、はじめに

近世後期における庄内歌壇は、庄内藩九代藩主酒井忠徳^(注1)(一七五五―一八一二)が、和歌を愛好し、宮部義正そして冷泉為泰に師事し、日野資枝^(すけき)などの堂上歌壇との交流があったことが知られている。その影響もあり藩内にはようやく和歌への関心が高まり、和歌を詠ずる者も増えてくる。特に、女流歌人の杉山廉^(注2)(一七三五―一八〇八)は多くの和歌を残している。彼女自身も地元の歌人、久米景山に和歌を学び、また宮部義正や冷泉為泰にも学んでいる。その廉女を師と仰いで、彼女の許には多くの歌人が訪れて、和歌について学んでいく。「杉山の会」と称して集まった歌人たちは、白井固^(まこと)(一七七二―一八三八)、池田玄斎(一七七五―一八五二)、建部山比^(やまひ)子(一七七八―一八八三九)たちであり、彼らも多くの詠草や著作を残している。

江戸で中村知至^(ちし)の『古今和歌集遠鏡補正』が天保十四年(一八四三)に橘守部などの序を以て刊行され、庄内歌壇における和歌注釈

として一般に知られているが、この内容は、庄内において知至の師であった白井固が古今集を講じた記録に基づいたもので、白井固には、その他にも『可久藻草』、『藻塩草』など幾つかの著書が存在する。

先に、白井固の『百首略解』を翻刻・考察^(注3)したのであるが、固の後、池田玄斎の弟子である服部正樹は、『古今老のすさび』、『後撰老のすさび』、『拾遺老のすさび』という注釈書を残している。いわゆる三代集の全歌について詳細な注釈を加えた著書であるが、残念なことに全く流布することなく、現在に至っている。

服部正樹についてその生涯を略述すると、文化一四(一八一七)年生まれ、没年は明治二二(一八八九)年。弘化三(一八四六)年に家督を相続、嘉永六(一八五三)年公子酒井政明の守り役を勤め、万延元(一八六〇)年九月政明が出羽・長瀬藩主米津家の養嗣子となり、随行して当地に赴き、文久元(一八六一)年に鶴岡に戻り、江戸表納戸役、勘定目付を歴任する。和歌は、池田玄斎に学び、弘化元(一八四四)年に半年庄内に滞在した鈴木重胤^(注4)に国学を学び、以後数回庄内を訪れた重胤の教えを受けている。旧藩主奥方の和歌の師となり、多くの門人を養成した。明治一四(一八八一)年の明治天皇の東北巡幸に当たって、家集、及び三代集の注釈書『古今老のすさび』、『後撰老のすさび』、『拾遺老のすさび』を献上するも、納

受されることはなかった。

なお明治天皇の東北巡幸に関して、『山形縣行幸記』^(注5)には「士族服部正樹等卅六名詩歌を上る。正樹皇学に邃く詠歌を善くす。この時、また拾遺老のすさび八巻、後撰老のすさび七巻、古今老のすさび五巻を編して奉獻すと云」と記される。

二、『後撰老のすさび』の伝本

服部正樹は、『古今老のすさび』五巻、『後撰老のすさび』七巻、『拾遺老のすさび』八巻を著している。が、この注釈に対し、これまで全く言及されることがなかった。まず、江戸末期から明治初期という時代背景の中で和歌の注釈が時代的にあまり注目されなかったこと、とりわけ出羽という鄙の地での活動であったことも大きいことが、明治天皇に献上しようとするが受納されなかったこと、さらに『国書総目録』^(注6)に「老のすさび」・「老のすさび拾遺」と書名を掲げ「随筆」と分類されるというあり得ない悲劇があったことに拠ることもさらに大きいと思われる。江戸末期の随筆は各地に多く存在するし、鄙の地・出羽での、しかも中央に名の知られていない人物の随筆は、注目されるはずもないことである。が、随筆ではなく、三代集の注釈書であったのである。

鶴岡市郷土資料館には、服部正樹自筆のこれらの写本が所蔵されている。『古今老のすさび』、『後撰老のすさび』、『拾遺老のすさび』は、同装同型、薄縹色の表紙も同じである。

『古今老のすさび』五巻、函架番号SL／一〇八二(1)～(4)は、残念ながら巻三が欠落、五冊あるはずが、四冊しかなく、巻三の恋一・二の注釈が失われている。これは鶴岡市立図書館に寄贈された時点からこの状態であったことが函架番号から窺うことができる。『後撰老のすさび』七巻、函架番号SL／一〇八三(1)～(7)。『拾遺老のすさび』八巻、函架番号SL／四二五二(1)～(8)。両者は全部揃っているが、『拾遺老のすさび』は戦後に別の経路を通して市立図書館に寄贈されたものである。

今回、『後撰老のすさび』を通覧して、その内容を考察することを目的としている。『古今老のすさび』は白井固が本居宣長の『古今和歌集遠鏡』に基づいて講じており、それに基づいて作成された想像され、かつ端本でもあるので、今回は『後撰老のすさび』を採り上げる。鶴岡市郷土資料館本は、服部正樹自筆本であり、書き込みなども本人のものである。なお、服部正樹自筆の歌集も鶴岡市郷土資料館には幾つか所蔵されているので、筆跡を特定するのは容易である。他に伝本としては、杉谷寿郎氏蔵本があるにすぎない。

『老のすさび』（以下、鶴岡市郷土資料館本『後撰老のすさび』を

このように略称する)は、袋綴、薄縹色の表紙の七冊、函架番号は、「SL／一〇八三／(1)〜(7)」。外題は表紙左側に「後撰老のすさび」と打ち付け書きで、表紙の大きさは、縦二四・三、横一六・八cm。一面行数は、ほぼ一七行、七冊ともに遊紙はない。内題(端作り題)は、「後撰和歌集第二」と墨書し、その下に朱で「老のすさび第一」、やはり朱でその下に「服部正樹述」と記される。和歌は一行書きで、詞書は約四字下げ、注釈はほぼ五、六字下げで記され、一部頭注の形で、難易語や用例を書き加えている。七冊の内容は第一冊(巻一)が六〇丁、春上・中・下、夏。第二冊(巻二)が七二丁、秋上・中・下、冬。第三冊(巻三)が五九丁で恋一・二、第四冊(巻四)が六八丁、恋三・四、第五冊(巻五)が六〇丁、恋五・六をそれぞれ収めている。第六冊(巻六)は、六五丁で雑一・二・三、第七冊(巻七)は六〇丁、雑四、離別、羈旅、慶賀、哀傷を収めている。蔵書印は、「服部氏蔵書」。服部正樹の自筆本で、昭和一六年に服部正平氏が鶴岡市に寄贈している。先に触れたように『古今老のすさび』、『拾遺老のすさび』も同型同装で、正樹自筆の本である。『拾遺老のすさび』表紙見返しの袋の中に挿紙があり、そこには三部のうち『拾遺老のすさび』を兄より家宝にせよと大正十年に渡された旨が記されている。戦後になって、鶴岡市に寄贈されたものである。

杉谷本『後撰老のすさび』も全七冊、それぞれに収めている巻も

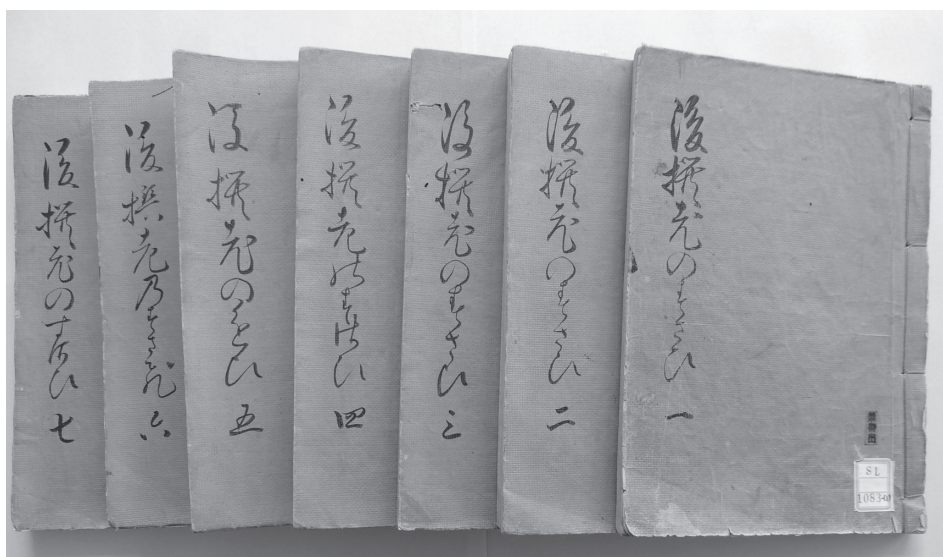
服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

一致する。表紙は紫色、雲型と鳥の刷り紋様の袋綴の本で、大きさは縦二四・二cm、横一七・〇cm、本文は一面一三行書きである。明治初期頃の書写である。注釈本文は、丁寧に書写されたとおぼしく、ほとんど鶴岡市郷土資料館本に一致する。相違点は、鶴岡本が頭注で記された部分の半分ほどを貼り紙にしている点である。

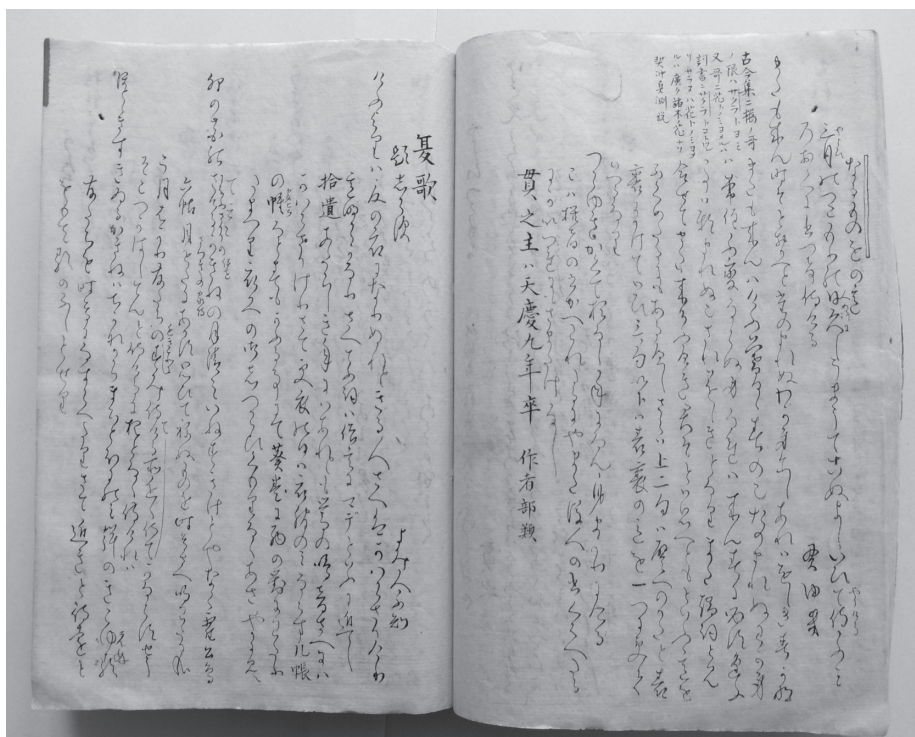
これら『老のすさび』が内題で「服部正樹述」と記されていることについては、『古今老のすさび』第二冊冬部の途中に「霜月廿九日講了 昌樹」(服部正樹は、昌樹とも署名する)と書かれており、三代集全体を講義したものを纏めたものと推定され、そのために「述」としたと考えられる。

次ページに①『老のすさび』全体と②「春下・夏」の写真を掲げた。②の春下一四六番歌の詞書・和歌と注釈部分には詞書に本居宣長『後撰集詞のつがね緒』の注記が見られ、また注釈本文の上部に、「古今集二桜ノ哥ノ限ハ…」と頭注が見られる。夏部は、冒頭三首の和歌と注釈。一四八番歌には、伊勢集、家持集の異文を注記し、一四九番歌には、本居宣長『後撰集詞のつがね緒』を注記している。『後撰集詞のつがね緒』に関しては、注記に留め、詞書そのものは訂正していない。ここには記されていないが、ほとんど「つがね緒」と注記している。

写真①鶴岡市郷土資料館本全体



写真②春下・夏の丁（鶴岡市郷土資料館本）



三、『後撰老のすさび』の注釈内容（一）

先に見たように本居宣長の『後撰集詞のつがね緒』は、詞書に校異本文のように書き加えられているのだが、その扱いは、次のようになる。先行する注釈書、中山美石の『後撰集新抄』^(注8)も『つがね緒』（以下『後撰集詞のつがね緒』をこのように略称する）からの引用が見られるが、比較すると、両者に差異が見られる。

『後撰集詞のつがね緒』詞書…二〇一箇所を、乱れを訂正し書き改めたもの。

『後撰集新抄』……………一七六箇所中、引用は一六〇箇所、一六箇所は引用説明なし（二五箇所は巻一七・一八につき該当せず）

『後撰老のすさび』……………二〇一箇所中、七八箇所に記載。ただし、本文の引用は七例のみ。（『新抄』欠落部分の二五例中、九箇所に記載。）

『新抄』（以下、『後撰集新抄』をこのように略称する）は、『つがね緒』二〇一箇所の改訂を全て引用しているわけではなく、一七六箇所中、一六〇箇所をそのほとんどを注釈の上部にそのまま頭注の形で引用しているのである。なお『新抄』は巻一七・一八を欠くので、その部分の『つがね緒』二五例は除外している。『新抄』では、次のように注釈を注釈本文で触れる場合もある。

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

卷十二・八〇六番歌（『後撰集新抄』の本文）

男の、物などいひ遣しける女の、ゐなかのいへにまかりて、たゞきけれどもき、つけずやありけん。かどもあけずなりにければ、田のほとりにかへるのなきけるをききて。

○此詞書。はじめの男のといふ事は除くべし。又いひつかはしはいひかはしを写誤れるなるべしと。つがね緒に、見えたり。

このように引用しながらも、本来の詞書を訂正することはない。一方、『老のすさび』は、次のように記される。

卷二・五一（『老のすさび』本文は鶴岡市郷土資料館蔵本^(注9)による、以下同。）

おもしろきさくらを、りて、友だちのつかはしたりければ
つがね緒云、友だちにて伊勢がおもしろきさくらを、りてお
こせたりければ、おこせといふきをつかはしと云るは、誤
れり。他の集に例もあれど正しからず。

このように記す。この部分、『つがね緒』にはつぎのように記載されている。

『つがね緒』

友だちにて伊勢がおもしろきさくらををりておこせたりければ、（歌略）

此かへし伊勢なれば、いせがとこそ有べきに、友だちのといへるは、例のたがへり、又おこせといふべきを、つかはしといへるもわろし、すべて其歌のよみ人の方へ、他よりおこせるを、つかはしと書る所、いとおほかる、こは他集にも例はあれども、なほ正しからず、つかはすとは、他へやるをこそいへ、こなたへおこせるをいかでかさいはん、

『老のすさび』は、『つがね緒』の内容を簡潔にまとめて引用している例である。次も『つがね緒』の引用である。

卷十七・一二二〇番歌（『老のすさび』）

しぞくに侍ける女の、をとこに名立て、かゝることなんある、人にいひさわけといひ侍りければ

東緒云、かゝる事なんあるいひあらがへと、人のいひ侍ければなどあるべきにや、と有。しぞくは親族也。

『つがね緒』には、「此詞書のさまあるまじきことなるうへに、歌

と相かなはず、写し誤有なるべし。今こゝろみにいはば、云々 名たちて侍けるに、かゝることなんある、いひあらがへと、人のいひ侍ければ、など有べし。」と記すのだが、傍線部分のみ引用しているのである。さらに、次の例では、

卷三・九九番歌（『老のすさび』）

春花見に出たりけるを、^{アル男}見つけてふみをつかはしたりける、そのかへり事もなかりければ、^{エセザリケレバ}あくるあしたきのふの返事とこひにまうできたりければ、いひつかはしたりける^{オコセ}

この部分『つがね緒』では「此詞書、主客の詞たがひていとまぎらはしければ、右のごとくあらたむべし」として、詞書は、

春花見に出たりけるを見つけて、ある男の文おこせたりけるを、かへりこともせざりければ、あくる朝、昨日のかへり事と、こひにおこせたりければ、いひ遣したりける

としている。『老のすさび』は『つがね緒』の改訂部分を『つがね緒』と断らずに傍書しているのである。先の写真②の春下の貫之歌の詞書もまた夏三首目、一四九番歌の詞書にも異文注記のような形で、『つがね緒』の本文が書き加えられているのだが、このように依拠した先行資料を明示していない場合がまま見られるのも『老のす

さび』の特徴でもある。

次に、北村季吟『八代集抄』^(注10)との関連について、考えてみたい。

ここでは『後撰集抄』と呼称する。巻三、八一番の和歌である。

贈太政大臣相わかれて後、ある所にて其声を聞いて遣しける

藤原顕忠朝臣母

贈太政大臣は、本院ノ時平公にて顕忠ノ朝臣の父なり。母

は、源湛ノ女なり。

鶯の鳴なる声はむかしにてわがみひとつのあらずもあるかな

時平公の声を鶯になぞらへたり。下句は、わが身ばかりはも

とのやうにもなき事かな、と也。栄花物語、かすむめる空の

けしきはそれながらわがみひとつのあらずもあるかな。新古

今、昔見し春はむかしの春ながら我身ひとつのあらずもある

かな。いづれも皆我みのみかはり果たるよし也。

まず詞書の人物に注を付し、和歌の内容を簡潔に説明する。そし

て、「我が身一つのあらずもあるかな」の用例を『栄花物語』と『新

古今集』からあげている。この歌について、北村季吟の『後撰集抄』では、

次のように記す。注のみを掲出する。

○贈太政大臣―本院時平公、昭宣公一男、母人康親王女、延喜九

年薨。四十九。其年贈太政大臣。元左大臣。

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

○藤原顕忠―時平公男、母大納言源湛女、字 栽、更衣従五位

上。

○うぐひすのなくなる―鶯の声はむかしにかはらねど、我身はむ

かしにもあらずふるされしと也。鶯を時平の声せしに比

してよめり。

人物の注記は、『後撰集抄』が詳細であるが、『老のすさび』は人間

関係がわかる範囲で簡潔に説明している。また、和歌の内容に関し

ては、『後撰集抄』の注を前後逆にして言い換えた印象が強いが、『老

のすさび』のほうは、さらに用例を加えている点がよりわかりやす

くなっているとも言えそうである。

もう一例、巻八・四八八番歌「題しらず・読み人しらず」の和歌

である。

天の河冬は氷にの 浦さへ氷に 意万とちたれや石まにたぎつ音だづれ 興 意万にもせぬ

天の河冬は氷のに浦さへ氷に 意万とちたれや石まにたぎつ音だづれ 興 意万にもせぬ

天河を天漢とも河内の也ともいへど、こはなほ天漢とせんか

た、風雅の心ばへなるべし。銀河は、常にも音あるものならず

ともいはんが、そは理に過て論に足らず。彼久かたの月の桂も

秋はなほ紅葉すればや照まさるらん、など同じ心ばへなるを思

ふべきなり。

〔頭注〕たれやは、タレバニヤ也。

ここでは、和歌本文に対し、『古今和歌六帖』及び『新撰万葉集（菅家万葉）』の校異を示す。和歌の内容については、「天の河」が河内の地名と天上の天の川（銀河）との両説から天上の天の川とするほうが風雅であること、天の川は「音」がないことに対し「それは理に過ぎて論に足らず」と切り捨て、壬生忠岑の和歌を紹介し、頭注に三句目「とちたれや」の「たれや」は「たればにや」であると初步的な語釈を加える。これを『後撰集抄』で見ると、次のようになる。

○あまの川冬は氷に―とちたれやは、とちたればにや也。此天河は河内の国なるべし。銀河にてもにや。

『後撰集抄』の語注を頭注に引用し、河内の川であろうとしながらも、天の河かもしれないという季吟の読みを一步進めて、天上の天の川を詠んだものとしている。季吟の『後撰集抄』は、参考にはしているが、全て受け入れるというものでもないことが窺われる。

次の例は、『新抄』では欠落している巻十八、雑四の一三〇一番歌の注釈である。

十月ばかりむかしおもしろかりし所なりとて北山のほとりに
これかれあそび侍けるついでに かねすけの朝臣

おもひ出てきつるもしるく紅葉の色はむかしにかはらざりけり

初句は端書の、むかしおもしろかりし云々にあたりてしか思ひ来しにしろく也。しろくは、顯く也。昔にかはらずおもしろければ其中のひとつをとり出て紅葉の色のむかしにかはらじとはよめる也。色はと云にいろのみはかはらず、他はかりしとやうの意と季吟抄にあれど非也。さらばしろくといへる詞、詮なきなり。

季吟の注釈を否定する。季吟『後撰集抄』は、次のように記す。「おもひ出てきつるも―しろくは、いちじるしく也。思ひ出て来たるしろし、いちじるしく、紅葉はむかしにかはらずと也。色は昔にかはらずといふに、所こそむかしのやうにもなけれと含めたる也。」はたして北山のほとりは、紅葉以外はどうかであったのだろうか。「は」は確かに他と区別して取り上げる場合にも使用する係助詞であるが、紅葉の色だけが変わらないのであれば、違った表現をしていると思われる。工藤重矩氏『後撰和歌集』^(注11)は「思ったとおり紅葉の色は昔と同じだったなあ」、片桐洋一氏『後撰和歌集』^(注12)は「まさにぴったり。紅葉した色は昔と変わっていなかったよ。」と口語訳をしている箇所、全体の景などへの細かなところには言及がないものの、昔の景に出会えた喜びを詠んだものと見てよいのではなからうか。季吟

の注を非とした正樹の読みのほうが優れていると思われる。

四、注釈と先行注釈書との関連（二）

季吟『後撰集抄』との関連について簡単に触れたが、次のような注釈本文を見ると、もう少し違った見方ができそうである。

(1) 卷一・春上 四二

松のもとにてこれかれ侍て花を見やりて 坂上是則

ふかみどりときは松のかげにゐて うつろふ花をよそにこそ見れ
ときはとは、常磐の意にて、松などの常に枯ぬには常葉と云
てかなへるを、かくいひきたれるは、混れたる也と県居の大
人もいはれたり。万葉六に、橘は実さへ花さへその葉さへ枝
に霜ふれいや常葉の樹、とあるを思ふべし。此うた、花をい
ひくだしたるは、御屏風の絵などよめるにて祝のこゝろをふ
くめるなどにやあらん。

〔頭注〕 正樹云、此うたも古郷人のよめる意にて、もはら絵のさま
にて家などあるかたへに松のたてるにやあらん。

国学を鈴木重胤に学んだ正樹であれば、万葉集卷六・一〇一四番歌
を引用することは驚くほどのことではないが、「県居の大人」、賀茂

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

真淵の言葉が唐突に現れることは何故なのだろうか。次の注釈を見
てみたい。

(2) 卷七・秋下 三五六

こしのかたに思ふ人侍ける時に つらゆき

秋のよにかりも鳴てぞわたるなるわがおもふ人のことづてやせし
雁かものかもは、てにはにて、雁やらん鳴渡ると也。蘇武が
故事なり。かのこしなる人のなつかしきに言伝はなきかとな
り。また、かりかもは、かりがねの誤るらんと磯足いへり。
甕丸はかりかもは、即雁の事なるべし。をしがも、あぢがも
などすべて其類の鳥をかもといふならんとはおもふといへ
り。伊せ人茂岳といへるが、この秋のよの空に鳴声のするは
我思ふ人の住て居る越路より来る雁カヨヤマアかも、さすれば、
かの思ふ人が定めて言づてを為したでかなアラフと云なるべし
といへり。

北村季吟の『後撰集抄』は、「雁かもなきては、雁やらん鳴渡ると
也。是も蘇武が古事より、彼越なる人のなつかしきが言伝はなきか
との心也。」と端的に纏めている。『後撰集抄』を承けた表現に続い
て、さらに注釈が続く。言うまでもないが、「蘇武が故事」は、『漢
書』に見える話で、匈奴に捕らわれた漢の武将・蘇武が雁の足に手

紙を付けたという故事である。が、続く注釈内容で、ここに出てくる人名が唐突な印象を受ける。「磯足」は、加藤磯足^{いそたり}、本居宣長・春庭門の国学者であり、「甕丸」は、夏目甕麻呂^{みかまろ}、同様に本居宣長・春庭門の国学者、そして「伊せ人茂岳」も、植松（小林）茂岳^{うけおか}、本居春庭・大平門の国学者である。彼らの会話が突然この注釈に出てくるのであるが、次の『後撰集新抄』の該当部分を比較すると、その理由が明確になる。

こしのかたに思ふ人侍ける時に

○こしのかたとは、越前越後の国の方をいふなり。

貫之

秋の夜にかりも鳴てぞわたるなる、異ね一本かりかもなきてわたるなり我思ふ人のことづてやせし

○抄には、かりかもなきては、雁やらん鳴渡るとなり。是も蘇武が古事より彼越なる人のなつかしきが、言伝はなきかとの心なりとあり。又かりかもは、かりがねの誤なるべしと加藤磯足はいへりき。磯足は越前越後の人にて鈴鹿麻呂云、かりかもは、即屋ノ穴のをしへ子なり雁の事なるべし。さるは、をしかも、あじかもなども、すべて其類の鳥をかもといふならむと思ふといへり。師云、此説もさる事なれども、こは一説といふべし。此歌にてはかりがねの誤ならんとの説、よろしくおぼゆといはれたり。また小

林茂岳は、かりかもは雁哉^{カモ}なるべし。句の結のかもの言は、此集の頃はかなといへど、かゝる所は、かなとはいはれざる故なり。さて、かもとかなとは、意聊異なり。一首の意は、此秋の夜の空に鳴声のするは、我思ふ人の住で居る越路より来る雁力ヨヤマア、さすれば、かの思ふ人が、定て言づてを為^シたでかなアラウと云なるべしといへり。此説は抄の誤に近けれど、猶委しきなり茂岳は伊勢ノ岡久居の殿人なり。

注釈本文が類似していることは明白であろう。『新抄』は、『後撰集抄』を引用し、さらに同門の人々の意見を記すのだが、『老のすさび』も少し省略する形で、三人の発言内容も引用しているし、とりわけ「この秋のよの空に鳴声のするは我思ふ人の住で居る越路より来る雁力ヨヤマア、さすれば、かの思ふ人が定めて言づてを為^シたでかなアラフと云なるべし」は、そのまま用いているのである。しかも『新抄』は「抄に」と『後撰集抄』からの引用を明示しているのに対し、『老のすさび』は全く出典を記さず、『新抄』を参照していることも明らかにしてはいない。

引用が長くなるので原文を掲げなかったが、(1)でも『老のすさび』の部分「ときとは、常磐の意にて磐の常なるが如く、うごきなくとこしへなる意。又、とこはと云詞あり。そは、万葉卷六に「橘は実さへ花さへ其葉さへ枝に霜ふれどいや常葉之樹」とあるにて、

常葉とは字の如く常に枯ぬをいふなり。されば松なども此常葉の方なるを、や、古くよりときはといひきたれるは、混れたるなりとはやく県居ノ大人などいはいれたり。」と『新抄』が割注で示しているところである。

また、(1)において「御屏風の絵など…」と賀意を読み解くのはさすがとも思われるが、頭注で屏風絵を想定するのは行き過ぎであろう。

(3)

夏のよの月はほどなく明ぬれどあしたの間をぞかこちよせつる興風集

大平云、夏のよはほどなく明るなれど、夏のよの月は朝まで残てあれば、夜べ翌朝の間を続足して月が朝を夜へかこちよせたるよといふなるべしといへり。正樹云、こは有明の月を見てよめるにて、月はといふを、四の句の上におきて心得べし。かこつは、兼盛集、白雪のふるとしながら庭の梅花とかこちてにほひやはせぬ、かこちはかこつけ也。

この(3)でも、大平（本居大平）の名前がいきなり現れる。これも、『新抄』に依るものである。当該部分を引用する。

此歌もいと心得がたし。奥義抄には、月見るほどもなく明ぬれば朝の間、日の出ぬほどを夜と思ひなして月を見るなり。

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

かこつとは夜とおしていひなす意なりとあれども、穩にも思はれず。師翁云、夏の夜はほどなく明るなれど夏の夜の月が朝まで残てあれば、夜へ翌朝の間を続足して、月が朝を夜へかこちよせたるよといはれたり。かこちは、かこつけにて、兼慶集に「白雪のふる年ながら庭の梅花とかこちてにほひやはせぬ」とあるなどにて此歌のかこちよすといふをも心得べし。

正樹は、『新抄』の「師翁」をその指し示す人名、本居大平を直接「大平」と引用するのである。ここでは解釈が難解な『奥義抄』の説には触れず、大平の解釈を引用し、さらに自説を展開する。朝まで残った月を朝の間は月の光だとかこつけた、という解釈である。なお『新抄』の『兼慶集』を『老のすさび』は『兼盛集』と誤っているが、当該歌は『恵慶集』所収歌（一一四番歌）である。

『老のすさび』は、比較的長い注釈で記されたものであるが、先に見た季吟『後撰集抄』、そして美石の『新抄』の注釈を積極的に活用し、不必要と思われる部分は削り、簡略に纏め、納得できない部分は自分なりの解釈をも採り入れて作られた注釈とまず把握できそうである。

もう一例、触れてみたい。卷一、三番歌である。

〔平〕 兼盛王

けふよりはをぎのやけ原かきわけて 若菜つみにと誰れをさそはん

をぎの焼原は、拾遺、春日野のをぎの焼原あさるとも見えぬ
なき名をおほすなるかな、などもよみたり。誰れをさそはん
は、はるをいたく興ある事におもへる也。兼盛集、初霜のお
かぬだにこき紅葉のいろのさかりをたれに見せまし。兼もり
集、諸ともにわがをるやどのうめのはなあかぬにほひをたれ
に見せまし、などの類也。歌の意は、明けし。

〔頭注〕 劉滄長洲懷古詩、起句云、野燒空原荻灰。

当該歌を『新抄』では、次のように記載する。

兼盛王

けふよりはをぎのやけ原かきわけて若菜つみにとたれをさそはん

○歌の意は明かなり。末句は、其事をいたく興ある事に思へ
る意なり。兼盛集「もろともに我をる宿の梅の花あかぬにほ
ひを誰に見せまし」。重之集「初霜のおかぬだにこきもみぢ葉
の色のさかりをたれに見せまし」などの類なり。此歌、大和
物語には、む月ついたちごろ、かねもり、大納言殿にまゐり
たりけるに、物などのたまはせで、すゝろに歌よめとのたま
ひければ、ふとよみたりける。「けふよりは云々」とあり。荻
の焼原は、拾遺雜春「春日野のをぎの焼はらあさるとも見え
ぬなき名をおほすなるかな」なども見えたり。此集やはじめ

ならん。

『新抄』と比較すると、大和物語の記載を省略し、注釈内容の順序を
変更して記載している感が強い。「いたく興ある事に思へる」が一致
するし、兼盛集、重之集の用例も一致し、拾遺の歌も同じなのであ
る。頭注で漢詩の例を付けた部分だけがオリジナルということにな
る。ただ『新抄』のをぎの焼原が「此集やはじめならん」という注
記は歌言葉に対する大切な指摘であり、個人的にはこの注記も取り
入れるべきものと思われる。

五、注釈と先行注釈書との関連（三）

ところで、先行する注釈書を他にはみていなかったのだろうか。
『老のすさび』に、次のような記述が見える。卷十五・一一〇八番歌
詞書の注である。

あはぢのまつりごと、人の任はてゝのほりまうできての頃、
かねすけの朝臣のあはた口の家にて

粟田 拾芥神楽岡云々 淡路掾に任せられし事、歌仙伝、
古今集目録等に見えず、なほ考ふべしと、標柱にいへり。

この『標注』は、岸本由豆流の『後撰和歌集標柱』^(註13)と思われ、実

際、次のように記載されている。

『後撰和歌集標注』 一一〇八番歌頭注

○躬恒淡路掾に任せられしこと、古今集目錄歌仙伝等にみえず可考。

明らかに『標注』を正樹が見ていた証拠となるものである。『標注』は、ほとんど注釈本文がなく、辞書や史書、漢籍などとともに、和歌の用例が多く引用されている注釈書である。比較的多くの和歌を引用しているのであるが、今、次の二巻の引用和歌を見てみると、次のようになる。

巻五 引用和歌 『標注』

三六首

『老のすさび』 四三首

『標柱』・『老のすさび』 一致する和歌 一一首

巻六 引用和歌 『標注』

五二首

『老のすさび』 五〇首

『標柱』・『老のすさび』 一致する和歌 一七首

『標注』、『老のすさび』それぞれの引用和歌を見てみると、お互いに一致する和歌が意外に少ないこともわかる。次の例は『老のすさ

び』巻六・三一八番歌の注釈である。

よみ人しらず

秋のよの月の影こそ木のまよりおち葉衣と身にうつりけれ

月の影は月に葉の影の身にうつる也。契沖法師は、おち葉衣とありては心得がたし、此歌菅家万葉、秋之夜之月之影許曾自木間墮者衣砥見江亘氣礼と有。真名にか、せ給へるにて心得べしといはれたり。月影は、殊にめに立て白くみゆれば、白妙の布など、見たるこゝろなるべし。落葉衣と云詞の例はいまだ見ざれども、月影の木間をもちて現に身にうつるを、仙人などの木の葉を綴りて衣たるさまのごと、おもひよせたるなるべし。曾丹集、吹ちらず冬のあらしぞうらめしき木の葉を衣とたのむ山人。大平云、拾遺集に、月のきぬをきて侍けるに、久かたの月のきぬをばきたれども光はそはぬわが身也けり、といふ歌の月のきぬといふことを月々の衣也などいふ説は、いかゞなり。こは調^{ツキ}の緒なるを月の意にとりなせるなり、といはれたり。されば、今も調の緒の意ならんか。調ノ緒ハ延喜式に見えたり。落葉衣といふ事のうたがはしきによりて考にもといへりとあり。

『標注』の頭注は、次のような引用である。

○菅家万葉 もみち葉のちりくる時は袖にうけん地におとさばきず

もこそつけ

○曾丹集　ふさちらす冬のあらしぞうらめしき木の葉を衣とたのむ山人

○菅家万葉　秋之夜之月之影許曾自木間墮者衣祗見江亘気礼

○川杜云　後撰の哥は心得がたし　此真字にかゝせ給へるにて心得べし　哥の心は木の間より洩くる月の影衣の役となるるよしなるべし

『新撰万葉（菅家万葉）』の「秋之夜之」（三六二番）及び曾丹集「吹ちらす」（一二八九）が一致し、契沖の『河杜』の引用も一致するが、『新撰万葉』の「もみぢ葉の」（三五七番）は『老のすさび』に見えず、『老のすさび』は拾遺集四二二番歌を『新抄』の注とともに用いている。

先に、三番の兼盛歌を例に掲げたが、あの漢詩の引用も『標注』に見られ、そこには「劉滄長洲懷古詩起句云、野燒空原尽荻灰」とある。引用の際に「尽」を脱しているのだが、唐の詩人劉滄の長洲懷古詩は、『全唐詩』によれば、「野燒原空盡荻灰、吳王此地有樓臺」（野燒かれ原空しくして尽く荻の灰、吳王此の地に樓台有り）とあるべき詩句の一部で、『標注』で語順が相違したものを『老のすさび』は一字書き落とした形で誤謬ごと引用している。

また気になることがある。先行する注釈書に疑義がなかったのだろうか。卷十一・七〇一番歌では、次のような注釈本文となっている。

女のもとにつかはしける
定方公　内大臣高兼公二男
三条右大臣

なにしおはゞあふ坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな
初句は、名におふならば也。さて、其名におふもの、なれば、此詞すはりがたし。この女の名さねなどいへるにはあらじか。さらでは名にしおふてふ詞をさまりがたき也。抄には、逢坂山に逢ふといひ、さねかづらに小寝をいひて名におふの結びとせれど、しからず。すべていはゞ、さねと名におはゞあふ坂山のさねかづらのごとく人にしられず来るすべもあれかし、の意なり。さねかづらは、和名抄草木部云、○和名作祢加豆良○五味。素性集　音にのみならしのをかのさねかづら人しれずこそくらまほしけれ　拾遺恋二　無名のみ立田の山の青つゝらまたくる人も見えぬ所に

珍しく「抄」と『後撰集抄』の引用をしているのであるが、ここでは「名にしおはゞ」の「名」を人名としないと落着かないという。しかしほとんどの注釈では、名を「逢坂」の「逢ふ」および「さねかづら」の「さ寝」の両方か、一方としている部分である。因

みに正樹の師・池田玄斎と深い交流のあつた歌人、白井固は地元・鶴岡で小倉百人一首の注釈書『百首略解』^(注14)を著している。そこには、次のように見えている。

三条右大臣

名にしおはゞ逢坂山のさねかづら人にしられてくるよしもがな

後撰恋三、女のもとにつかはしける、と有。歌のこゝろは「逢さか」といひ、「さ寝」といふ名におはゞ、人にしられず忍びてくるよしもあれかしとなり。「かな」は、かもじ濁りて願ふ意有。「しられで」には、かづらの縁なし。只「くる」と云にのみ。「さねかづら」は五味子、俗に鬢かづらとて髪につくるものなり。其の蔓を手して繰わざのあれば、「来る」とつゞけたる也。さて此物いにしへ逢坂山より出しにや。今しるべからずといへどもさもなくしては「あふ坂のさねかづら」とはつゞけがたかるべし。「名にしおはゞ」の詞も心得がたし。もし逢坂山にとりし葛を女のもとにおくれるにそへて遣し、歌ならば聞ゆべし。おほつかなきまゝに云。

一応、一般的な解釈を示した上で、「逢坂山のさねかづら」に拘る。逢坂山に実葛が生えていなければ、このような表現は難しいという

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

のである。初句「名にしおはゞ」の表現も「心得がたし」と言い、「おほつかなきまゝに云」と結ぶ。一方『新抄』は比較的長い注釈となっているが、「名にしおはゞ」は三句目の「さねかづら」の「さね」に係るとし、また逢坂山の逢という意味も採った上で、「一首の意は、逢坂山の逢といふ山のさねかづらの、その名に負てある如く打なびく物ならば、人にしられず心やすくなびかせうけひかしむるよしもがな、となり。」とし、さらに一説として「名にしおはゞ」は逢坂山の逢にだけ係る解釈をも紹介している。

『老のすさび』は、「すべていはゞ、さねと名におはゞあふ坂山のさねかづらのごとく人にしられず来るすべもあれかし、の意」と解釈する。女性の名を「さね」と考えるのであるが、このような解釈は未だ他には探せない。白井固の注釈の、「名にしおはゞの詞も心得がたし」、「おほつかなきまゝに云。」という表現から発展させたものであろうか。無理な解釈であると思われる。

次の例は、卷十一、七〇一番歌である。

女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて

謙徳公也 天徳四年八月参議、左中将 伊尹の朝臣

すゝか山いせをのあまのすて衣 しほなれたりと人やみるらむ

一・二の句は諸説ありて今定めがたし。今は衣をぬぎおきたるを、とりにとてやれるなれば、ことなる心ありともみえず。

序のごとくいひつゞけたるのみならんか。しほなれたりは、塩馴にて、しほかゝりて見苦しくなえ／＼となりたる衣也と、上の海人の縁語によまれたり。伊勢をの海人てふ語は、源氏須磨、うきめかる伊せをのあまを思ひやれもしほたるてふすまの浦にて。同絵合、見るめこそうらぶれぬらめとしへにしいせをの海人の名をやしづめん。千載集権大納言定国、しほたる、いせをのあまやわれならんさらば見るめをかるよしもがな。夫木、後鳥羽院、思ふかたのいせをのあまの釣ざほの長き夜あかずぬる、袖かな。

『新抄』は、この和歌に対して次のように記す。

女のもとにきぬをぬぎおきて、とりにつかはすとて

伊尹の朝臣

すゝか山いせをのあまのすてごろも しほなれたりと人や見るらむ
○鈴鹿山伊勢をとつゞきいぶかしきことなり。いせをのをも
じも心得がたしと鈴屋大人いはれたり。此辞説々あれどもい
づれも考へ得たりとは思はれず。猶然るべく覚ゆる説もあら
んには、追考に記すべし。すて衣は、とるにたらぬ見ぐるし
き衣といふ意なるべし。海人の海に入る時にぬぎ置などいふ
は、委しきに過ぎてかへりてわろしと師翁いはれたり。一首

の意は明らけし。

『新抄』を踏まえて、初二句については「定めがたし」と短く触れ、「すて衣」についてはやや詳しく触れ、さらに、『新抄』が触れなかった「伊勢をの海人」の用例を四首掲げ、歌言葉として使用されていたことを明らかにしている。

六、俗言、また出羽という地域性

『老のすさび』には、ほとんど地元、出羽の話は出てこないが、一箇所だけ地元の話が現れる。次の例である。

(4) 巻五・秋上 二五三

(題しらず)

よみ人しらず

秋風の草葉に編集六そよぎてふくなへのべ一本に ほのかにしつるひぐらしのこゑ

『和名抄』に茅蜩爾雅注云、茅蜩一名鱗子列反、和名比久良之小青蟬也。正樹云、わが羽前国なる鶴岡にては、小蟬の羽大きくいとるはしきがある朝のほどもたえて鳴かぬにもあらねど、もはら暮かけて鳴が一声二こゑ鳴て、他にうつりてなくを、ひぐらしとはいふなり。ツク／＼ホウシと鳴は、松嶺、清川といふあたりには多しとぞ。こは、『和名抄』蛸蟬云々和名久豆久保名久とあるなるべし。またせん／＼と鳴は、山蟬とぞ。こゝ之八月鳴者也

にはいひて別也。拾遺、朝ぼらけ日ぐらしの声聞ゆなりこや
明くれと人のいふらん。さて、草葉そよぎてに涼しく夕方に
なれるをおもはせたり。

注釈本文に「羽前国」と見える。出羽が羽前・羽後と分割されたのは明治元（一八六八）年であるので、この語が見えるということ
は、この注釈は明治になってから書かれたものと了解される。庄内
の地名、鶴岡（現鶴岡市）、松嶺（現酒田市）、清川（現庄内町）が
見えている。これも『新抄』の影響と考えられ、『新抄』では、「ひ
ぐらしは和名抄に茅蜩、爾雅注云、茅蜩一名鱗子列反、和名比久良
小青蜩也とあり。我が吉田などにて伊勢蜩とも云て、伊勢の朝熊山
などに多くありて鳴声はミン／＼と聞こゆる蜩をひぐらしなりとい
へど、何国にてもしかいふ事にやしらず。又国により所によりて
は、今もたしかにこれぞとしられたる所もあるべし」と記し、「ツク
／＼ホウシと聞ゆるがあるを、ひぐらしなりといふものもあれど、
そは（中略）もとより異物なるべし」とも記す。拾遺集（巻八雑上
四六七、左大将済時）の和歌を引用しているが、これも『新抄』に
見える和歌で、ひぐらしは夕方に鳴くと言われるが契沖がこの歌を
引いて夕方に限らないことを述べた部分にある用例なのである。

また、『老のすさび』の注釈の特徴として、また「俗」という語が

服部正樹『後撰老のすさび』の注釈内容

しばしば見受けられる。例えば、四五三番歌「かみなづきしぐれば
かりを」の注に「○ばかりの詞は、而已^{ノミ}、俗言ニ、バツカリ。古今、
石上ふるき都の時鳥声ばかりこそむかしなりけれ。菅家万葉、天川
秋の夜量^{ガク}よどまん流る、月の影をとむべく」の如くに、「俗言」あ
るいは、三六〇番歌の「やどをよかなむ」の語釈として「よかなん
は、万葉十一旋頭歌曲道^{ヨキミチ}と書たり。直道の反対也。よきてふ詞は今
俗にヨケル」と使われる。『新抄』でも「名におふとは其名に負持^{オシモ}
事にて、俗言にいはゞ某ト名ニアル、其名ノ通りノといふ意なり」
などとはしばしば俗言、当時の言葉が現れる。白井固の『百首略解』
も同様であり、本居宣長『古今和歌集遠鏡』が俗語で和歌を訳して
いることの影響があるのではなからうか。この時期、宣長以外にも
口語、俗語を以て歌言葉の説明することが起こり始めるが、宣長の
流れを汲む『新抄』の中山美石、また宣長の流れを汲む足代弘訓に
和歌を学んだ白井固、その流れを受け継いだ正樹であつてみれば、
同じように俗言で説明するということが一般的であつたと考えたの
ではなからうか。宣長の流れで十分だと判断していたとも考えられ
る。ただ、宣長は、和歌を口語訳するところまで行つたのに対し、
美石も白井固もまた正樹も、語を説明するところでは俗言は用い
ていないのである。

正樹は、時期は不明ながら旧藩主奥方の和歌の師となつて和歌を

講じているし、庄内地方で多くの門人を養成している。『鶴岡市史下』^(注15)（第五章 文学 明治の和歌の項）には「明治時代の鶴岡の歌人として第一に挙げなければならないのは服部正樹（昌樹）であろう。正樹の歌集としては『花橘』『橘家集』『椎廻棠』などがある。その歌は伝統的な古今調であった。」と記される。多くの人に和歌を指導し、和歌の講読を行っていた正樹は、またこのように注釈作業をも行っていたのである。そして、明治十四年の天皇東北巡行の際にこれら三部の注釈を献上するのだが納受は果たされなかった。ここで天皇家の許に収められていれば、これらの注釈はもう少し注目されていたことであろう。

七、むすび

近世後期庄内歌壇は、一九世紀になってようやく活動を開始し、白井固は小倉百人一首の注釈『百首略解』を著した。また固は『古今和歌集遠鏡』に基づいて古今集を講義し、『古今和歌集遠鏡』を補う『鏡の塵』も著した。その著は散逸したものの、その内容は『古今和歌集遠鏡補正』として弟子・中村知至が出版した。そして、服部正樹は、古今集以下の三代集の全歌に注釈を施したのである。三代集の全歌に注釈を施すこと自体、特筆すべき業績であろう。だ

が、全くその業績が注目されずに、現在に至っていた。

そのうちの『後撰老のすさび』の注釈内容を検討したのだが、その注釈内容は、比較的長いもので、先行する注釈書『新抄』の注釈を積極的に活用し、また『標注』の和歌用例も取り込んで、必要と思われる部分は削り、簡略化した上で、納得できない部分は自らの解釈をも採り入れて作られた注釈なのである。また、『新抄』にない部分は、季吟の『後撰集抄』を利用するが、これも自分で納得できない部分は自説を述べるという方法を取っている。

本居宣長の『後撰集詞のつがね緒』の詞書における指摘も注記の形で採り入れている。宣長そしてこの系統の学問を基本として、この注釈は出来上がったものとも把握できるのだが、個人として江戸末期から明治初期にかけてこれだけの注釈を作成したことは驚くべきものがある。が、個人で行なったための誤謬（「さねかづら」には女性の名前「さね」があるなどの主張）も少なくないように思われる。

注1 酒井忠徳 第九代藩主。藩政改革し、また藩校・致道館を創設した。

注2 杉山廉 江戸後期の庄内の女流歌人。久米景山、宮部義正、次いで冷泉為泰に師事し、和歌を学び、庄内において多くの歌人を輩出した。著書に『廉女詠草』『おそぞくらの記』がある。

注3 拙稿「『百首略解』の翻刻と考察——近世後期庄内歌壇の側面——」（『山形

大学紀要（人文科学）第十九卷第三号・令和二年二月刊）及び、拙稿「白井固『首略解』の注釈方法」（『函館国語』第三十五号・令和三年一月刊）

注4 鈴木重胤 文化九（一一八二）年～文久三（一八六三）年。国学者。弘化元（一八四四）年、出羽・庄内を訪れ、大山地区に六ヶ月滞在し、多くの人々に講義をし、服部正樹は弟子として入門する。重胤は庄内にはこの後も六回、計七回訪れ、弟子たちに講義をしている。

注5 『山形縣行幸記』（大正五年・山形縣教育会・代表者小田切磐太郎・刊）

注6 『国書総目録』（岩波書店・昭和三十八年刊）には「老のすさび 七冊 随筆 〔著〕服部正樹 〔写〕鶴岡」また続いて「老のすさび拾遺 〔類〕随筆 〔著〕服部正樹 〔写〕鶴岡」と記載され、『補訂版国書総目録』（岩波書店・一九八九年刊）も同様の記載である。なお国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」には近年記載された。

注7 『本居宣長全集』第十四卷（筑摩書房・昭和四十七年刊）による。

注8 『後撰集新抄』は、『後撰集新抄 復刻版』（風間書房・昭和六三年刊）による。ただし、句読点は読みやすく改めた。

注9 『後撰老のすさび』は鶴岡市郷土資料館本を用いた。送り仮名は本文のままとしたが、句読点、濁点を私に付し、漢字も新字体に改めた。

注10 『後撰集抄』『八代集全註』（有精堂出版・山岸徳平編著・昭和五十四年十版）による。ただし、振り仮名は一部省略し、漢字は新字体に改めた。

注11 『後撰和歌集』（和泉書院・一九九二年刊）

注12 『新日本古典文学大系 後撰和歌集』（岩波書店・一九九〇年刊）

注13 『後撰和歌集標注』は、妹尾好信編著、和泉書院・一九八九年刊による。

注14 注3に同じ。本文は、慶應大学図書館蔵本による。

注15 『鶴岡市史 下』（鶴岡市役所・昭和五〇年刊）

〔付記〕本論は、和歌文学会令和二年二月例会（ズーム開催）での発表に基づいたものであり、内容は科学研究費補助金（基盤研究C）「近世後期における地方歌壇の和歌文学研究―山形県庄内地方を中心に―」（課題番号19K00316）の成果の一部である。発表に對し質問を頂いた兼築信行・神作研一両氏に御礼申し上げたい。また、貴重な伝本を紹介、お貸し下さった杉谷寿郎氏、そして伝本の閲覧・撮影をご許可いただいた鶴岡市郷土資料館、及び今野章氏に感謝する次第である。

A Consideration on Hattori Masaki's Annotation: *Gosen Oi no Susabi*

Yoji FUJITA

Hattori Masaki was from Shonai district in Yamagata, where waka poems were very popular during the late Edo period, and made annotations on *Kokin Wakashu*, *Gosen Wakashu*, and *Shui Wakashu*. This paper examined the contents of his *Gosen Oi no Susabi*, which is an annotation on *Gosen Wakashu*, and found that his annotation condensed Nakayama Umashi's *Gosenshu Shinsho* and Kitamura Kigin's *GosenshuSho* and Kishimoto Yuzuyu's *Gosenwakashu Hyotyū*, and added his original comments when needed.

山形大学紀要（人文科学）第十九卷第四号